

江吏部集試注（六）

木戸，裕子
鹿児島県立短期大学助教授

<https://doi.org/10.15017/10344>

出版情報：文献探究. 38, pp.31-44, 2000-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：



江吏部集試注（六）

木戸 裕子

（承前）、（五）は『人文』第二十三号に掲載している。

凡例

一、底本は板本群書類従を用い、後述の諸本により適宜異同を挙げた。

一、校異では、逐一の異同を挙げるのではなく、本文解釈に関わるものだけを記した。したがって、異体字については挙げていない。

一、校異に用いた諸本と略号は次の通りである。

内閣文庫（旧浅草文庫）本（内） 山口県立図書館本（山）

陽明文庫本（陽） 祐徳稲荷本（祐）

静嘉堂文庫本（静） 神宮文庫本（神）

国会図書館本（国） 無窮会図書館本（無）

東大図書館（E45 656）本（東A）

東大図書館（旧南葵文庫）本（東B）

岡山大図書館本（岡）

島原松平文庫本（島） 東北大図書館本（東北）

京大図書館本（京） 多和文庫本（多）

賀茂別雷文庫本（賀）

名古屋市立鶴舞中央図書館本（鶴）

本朝文粹（新日本古典文学大系）（粹）

本朝麗藻（校本本朝麗藻）（麗）

一、本文の漢字はできるだけ現行の字体に統一した。ただし、次の漢字は底本の字体を尊重した。

煙・烟 花・華 叢・藂 窓・牕など。

一、割注など小書の部分は「」に入れて示した。

一、訓読文は必ずしも平安時代の訓みによるものではないが、古辞書類を参考にした。

※本稿では巻上十七番と十八番の詩及び詩序を取り扱う。

※補遺

『江吏部集』試注（五）（『人文』第二十三号）の十六番詩序

「列鶴群」の書き下しについて金原理氏より、同じく「謂時人何云爾」の書き下しについて後藤昭雄氏より、また詩中の「取次」の語釈と書き下しについて後藤昭雄氏と工藤重矩氏より御教示をいただいた。また後藤昭雄氏からは十六番詩序全体が『本朝文粹』巻八に載せられていることを挙げておいた方が良い旨もご指摘いただいた。以下に訂正を載せるとともに、三氏に深く御礼申

し上げます。

【詩序二十六行目】

而列鵷群振鳳藻者有限 而かうして鵷群に列なり鳳藻を振

ふ者限り有り

【詩序四十一行目】

謂時人何云爾 時の人に何をか謂はんと云ふこと爾り

【詩第二句目】

汎酒清流取次廻 酒を清流に汎かぶれば取次く廻る

【語釈】

◎取次みだりがわしい、あわただしい。唐代の俗語。「取次ミ
タリカハシ」(『観智院本類聚名義抄』)。「花蓋抛巡取次飛」

へ『白氏文集』一一七四「酔後贈人」したがつて本詩句「汎酒
清流取次廻」の意味は「清らかな流れに浮かべると酒盃はあわた
だしく人々の間を廻っていく」となるう。

十七 暮春応製(勅毫高阜桃毛刃刀陶)

四十六年人未識

四十六年人未だ知らず

埋淪墨沼嬾抽毫

墨沼に埋淪し毫を抽くに嬾し

幸逢北闕仁心厚

幸に北闕仁心の厚きに逢ひて

遂使春卿礼秩高

遂に春卿をして礼秩高からしむ

〔匡衡四十七。初聴昇殿。兼侍読。去年再預加階。稽古力也〕

〔匡衡四十七にして初めて昇殿を聴され侍読を兼ね。去年再び加階に預か

る。稽古の力也。〕

白雪清歌鶯出谷

白雪の清歌鶯谷を出で

青雲采路鶴帰臯

青雲の采路鶴臯に帰る

猷君魯水壁中簡

君に猷ずるに魯水壁中の簡をもつてし

〔今春以尚書十三卷十餘日御読了〕

〔今春尚書十三卷を以て十餘日にして御読了んぬ。〕

投我綏山盤上桃

我に投ずるに綏山盤上の桃をもつてす

重士輕財恩市骨

士を重び財を軽うして恩骨を市ふ

好文偃武徳如毛

文を好み武を偃せて徳毛の如し

烟霞得境苦応惜

烟霞境を得て苦に惜しむべし

花月有時誰不叨

花月時有りて誰か叨らざらん

吏部侍郎思八座

吏部侍郎は八座を思ひ

〔式部大輔為侍読者。必早昇八座〕

〔式部大輔の侍読たる者、必ず早く八座に昇る。〕

尾州刺史夢三刀

尾州刺史は三刀を夢む

〔儒官兼刺史殊常之恩也〕

〔儒官の刺史を兼ねるは常に殊なるの恩也。〕

寄言天下懷才者

言を寄す天下の才を懷く者

自愛彈冠莫鬱陶

自愛し冠を弾じ鬱陶することなけれ

【校異】

1、製一制(山、無) 2、桃一抛(島)

3、淪一論(ミセケチシテ淪ト傍書)(内A) 一倫(島)

4、厚一原(山) 5、遂一逐(ミセケチシテ遂ト傍書)(静)

6、卿一郷(内A、陽、東大A、B、島、山、神、無、賀) 一節

の有るべき姿であつたらしく、匡衡の詩文中に桓榮の故事は頻出する。↓後藤昭雄「大江匡衡の詩文」(『平安朝漢文学論考』)◎礼秩||礼儀上、秩禄上での待遇。「夫高秩厚礼者 天譴之端也」(『本朝文粹』卷四「為入道前内大臣入道表」大江匡衡)

◎稽古力||古のことを考え究める努力。学問の力。「荣大会諸生、陳其車馬印綬日、今日所蒙稽古力也。可不勉哉」(『後漢書』卷二十七「桓榮伝」)「勅聽乘牛車到南大庭梨樹底。斯乃稽古之力」(『続日本後紀』承和九年十月十七日条菅原清公薨伝)

◎白雪清歌||白雪は陽春と共に楚国の歌曲の名。高尚なため、この曲に和すことができるものは国中で数十人しかいなかった。「客有歌於郢中者。其始曰下里巴人、国中属而和者数千人、其為陽阿薤露、国中属而和者数百人、其為陽春白雪、国中属而和者数十人、一略一是其曲弥高、其和弥寡」(『文選』「对楚王問」宋玉)二「八月十五夜江州野亭对月言志」白雪之歌の語釈を参照。

◎鶯出谷||鶯は冬の間山中の谷に籠もり、春になると高い木に飛び上がって声高くさえずるといふ。不遇であつたものが才を認められて世に出ること。四「七言 歳暮於藤少侯書斋守庚申同賦明月照積雪各分一字应教一首」の愚谷之鶯の語釈を参照。

◎青雲榮路||高位高官に至る道。「吾有二道友 藹藹崔与銭 同飛青雲路 独墮黄泥泉」(『白氏文集』三〇七「答崔侍郎銭舍人書問。因繼以詩」)二「八月十五夜江州野亭对月言志」青雲之路の語釈を参照。

◎鶴帰臯||未詳。鶴と臯の組み合わせでは「鶴鳴九臯」があるが、それは鶴が深い沢で鳴いてもその声は天高く響くの意で、賢者は世の中から離れていてもその声望が遠くまで知れ渡るといふ喩え。

したがって、「臯」は一般的には世間から離れて場所を指す。前句の「鶯出谷」との対句関係から考えれば「鶴帰臯」でよいが、何を喩えたのかはつきりしない。「鶴鳴于九臯 声聞于野」(『詩経』小雅「鶴鳴」)

◎魯水壁中簡||古文尚書のこと。漢の武帝の末、孔子の旧宅の壁の中から見つかったことからいう。「古文尚書者、出孔子壁中。武帝末、魯恭王壞孔子宅、欲以広其宮、而得古文尚書及礼記、論語、孝経凡数十篇。皆古字也」(『漢書』芸文志)

◎投我以||『詩経』国風・衛風「木瓜」による措辞。「投我以木桃 報之以瓊瑤 匪報也 永以為好也」(『詩経』国風・衛風「木瓜」)

◎綏山盤上桃||葛由が仙を得た綏山山上に桃があつた故事。仙界の食べ物。ここは天皇から賜つた桃をいう。「葛由者、羌人。周成王時、好刻木作羊壳之。一旦騎羊而入蜀。蜀中王侯遣人追之、上綏山。山在峨眉山西南、無極。随之者不得還、皆得仙道。山上有桃。故里諺曰、得綏山一桃、不得仙、亦足以豪」(『列仙伝』)

(『芸文類聚』果部上「桃所収」)◎重士輕財||立派な人物を尊び財産を輕視する。「当是時、齊有孟嘗、趙有平原、楚有春申、魏有信陵。此四君者、皆明知而忠信、寬厚而愛人。尊賢重士、約從離衡」(『史記』秦始皇本紀)「古者德貴而賤利、重義而輕財」(『塩鉄論』錯幣)七「七言。秋夜陪右親衛員外丞相亭子守庚申同賦秋情月露深詩一首」輕財重士の語釈を参照。

◎市骨||死馬の骨をかう。郭隗が、燕の昭王に話した故事。千里の馬を手に入れるために、死んだ馬の骨を五百金で買ったところ、

一年の内に千里の馬が三頭も到来した。人材を集めるために懸命なたとえ。「郭隗先生曰、臣聞、古之君人、有以千金求千里馬者、三年不能得。涓人言於君曰、請求之。君遣之。三月得千里馬、馬已死、買其骨五百金。反以報君、君大怒曰、所求者生馬、安事死馬、而捐五百金。涓人对曰、死馬且買之五百金、況生馬乎、天下必以王為能市馬、馬今至矣。於是、不能暮年、千里之馬至者三」
《『戦国策』燕策》「所謂燕王之市骨、而駿馬自来」《『本朝文粹』卷六「申大内記木工頭狀」藤原篤茂》

◎好文偃武Ⅱ文章を好み、武器を片づける。天下を太平にすること。

「王来自商、至于豊。乃偃武修文、帰馬于華山之陽、放牛于桃林之野、示天下弗服」《『書経』武成》「我后修文教而敦詩 偃武器而悦礼」《『本朝文粹』卷三「弁耆儒 对」大江拳周》

◎徳如毛Ⅱ徳は毛のように軽いがそれを行える人は少ない。「人亦有言 徳輪如毛 民鮮克举之」《『詩経』大雅「烝民」》

◎苦応惜「未苦惜風光」《『白氏文集』三二九八「惜春 贈李尹」》

◎花月有時Ⅱ「春色有時尽」《『白氏文集』三二九八「惜春 贈李尹」》

◎吏部侍郎Ⅱ式部大輔の唐名。匡衡は長徳四年、式部権大輔に任せられた。「(長徳)四年正月七日叙従四位下。同廿五日転式部権大輔」《『中古歌仙三十六人伝』》

◎八座Ⅱ参議の別称。定員が八人であるためにいう。「参議八人、唐名諫議大夫、相公、八座」《『職源抄』上》「伏檢故実、儒者之為式部大輔、以十年已下劣、必拜八座之例」《『本朝文粹』卷六「申三位狀」菅原文時》

◎尾州刺史Ⅱ尾張守の唐名。匡衡の尾張守補任は正暦三年と長保三年、寛弘六年の三度。こゝは、二度目の長保三年。「長保三年正月廿四日兼尾張權守」《『中古歌仙三十六人伝』》

◎夢三刀Ⅱ『蒙求』「王濬懸刀」で知られる故事。王濬は夢で寢室に懸けてある三ふりの刀が四ふりに増したのを見た。それは彼が益州の刺史となる吉夢だった。そこから転じて、国司となることをいう。「晋書。王濬字鼓祖曾(ママ)。夢懸四刀於梁上。其意甚惡之。主簿李牧曰、三刀為州、更一刀為益州。公、其為益州守乎。數日而驗會」《書陵部本『蒙求』二一三「王濬懸刀」》長保三年に尾張權守となり、この年寛弘元年にその任を終えた匡衡は、次の除目でも国司に任せられることを望んでいた。「官舎飽門館三刀幾九州」《『本朝文粹』卷一「字訓詩」源順》

◎儒官兼刺史殊常之恩也Ⅱ大江匡衡は長徳二年正月の除目の際に提出した「請依檢非違使勞兼任越前尾張等國守闕狀」《『本朝文粹』卷六》において「文章博士受領に任ずる例」として橘公材以下九名、「策家内官に居て受領を兼ねる例」として文章博士菅原是善以下六名を挙げている。この申文提出の時、匡衡は正五位下行式部権少輔兼文章博士。「望請殊蒙天恩、依檢非違使勞并儒學之功、被兼任越前尾張等之國守、將勵天下之学徒」《同申文》匡衡は申文提出から五年後に、念願叶って「儒官にして刺史を兼ねる」ことができた。

◎自愛Ⅱ自分を大切にする。「努力各自愛 窮通我爾身」《『白氏文集』四九六「寄微之三首」其の三》

◎彈冠Ⅱ冠を弾いて塵を落とす。仕官の準備をすること。『蒙求』「王貢彈冠」の故事。「前漢書。蕭育、字次君、少与朱博為友。

著文聞当世。王陽、少与貢禹為友。陽後仕至益州刺史。貢禹聞之、彈冠而一待。陽遂薦禹。成帝召為太中大夫。世称曰、蕭朱結綬、王貢彈冠」(書陵部本『蒙求』二九〇「王貢彈冠」)

◎鬱陶|| 悲しみに気持ちが悪くこと。「予將疇依 鬱陶乎予心 顔厚有忸怩」(『書經』五子之歌)「借託風月 記其鬱陶」(『本朝文粹』卷十一「早春侍清涼殿翫鶯花」小野篁)

【通釈】

春の暮れ帝の命によつて作る(毫高阜桃毛刃刀陶を勸韻とする)

生まれて四十六年間に知られることもなく

認められぬままに文章の道に没頭したが、もはや筆を執ることも倦んでいた

今幸いにも宮中におわす帝の厚い思いやりにあずかり

遂にあの春卿のごとく高い礼と秩をいただくこととなった

「私匡衡は四十七歳にしてやつと昇殿を許され、侍読を兼任することとなった。昨年は更に加階に預かった。これも学問の力である。」

それはあたかも、春清らかな白雪の歌を歌いつつ鶯が谷から飛び立つよう

また青雲の栄えある通い路を通過して鶴が沢へ帰っていくようなもの

私は帝に、あの魯の国の孔子宅の壁の中から見つかった尊い書物を差し上げた

「今春、帝に古文尚書十三巻をご進講した。十余日にして御読

了になった。」

帝は私にあの葛由が仙を得た緩山の桃にも等しい仙界の桃を賜った

帝は士を尊重なさつても財を軽視なさる方であらせられる。その御恩は古人が駿馬のために死馬の骨を高額で買ったごとく、才人を集めるために私のようなつまらぬ者まで厚遇なさるほどだ

帝は文事を好まれ武器をおしまいになり天下を平らかに治めになる。毛の如く軽々と徳を行ひ遊ばすが、実際に帝のように行える方は稀なのだ

この春と夏の境の時にあたり、春霞と懇ろに別れを惜しもう花や月はすばらしいものだが、時期があるので春が過ぎてしまえば誰が愛でむさぼろうか

吏部侍郎たる私は参議の座を思い(式部大輔で侍読であるものは必ず早い内に参議の座に昇る)

尾張守であつた私は次の国守を夢見ている(儒官にして国司を兼ねるのは特別の恩によるのである)

一言申し上げよう、天下の才有るものたちよ。自分を大切にしてお仕官の準備をし、決して鬱いではならぬ(才があれば必ずいつかは認められるのだから。)

十八 七言。夏夜守庚申侍清涼殿同賦避暑对水石応製一首。(并序以清為韻)

夫人情者聖王之田也

夫れ人情は聖王の田也

世治則学稼自茂

世治まれば則ち学稼自づから茂る

楽曲者明時之玩也

楽曲は明時の玩也

政調則德音遍聞*

政調へば則ち德音遍く聞こゆ

我后莅民以来

我が后民に莅みて以来このかた

学官逢時樂署得所

学官時に逢ひ樂署所を得たり

日慎一日

日一日を慎む

尽伝延喜之旧儀

尽く延喜の旧儀を伝ふ

風罷三風

風三風を罷む

已開長保之宝曆

已に長保の宝曆を開けり

於是

是に於いて

守庚申而不廢延齡之術

庚申を守りて齡を延ぶる術を廢せず

賞佳辰而不忘樂善之心

佳辰を賞して善を樂しむ心を忘れず

繞日夢月之家

日を繞り月を夢む家

冠青雲以從事

青雲を冠りて以て事に従ひ

左龍右貂之輩

龍を左に貂を右にする輩

履丹霞以承恩

丹霞を履みて以て恩を承く

方今

方今

避林鐘之炎暑

林鐘の炎暑を避け

对殿庭之水石

殿庭の水石に対ふ

班婕妤团雪之扇

班婕妤が团雪の扇

代岸風兮長忘

岸風に代はりて長く忘れ

燕昭王招涼之珠

燕昭王が招涼の珠

当沙月兮自得

沙月に当たりて自づから得たり

至夫池蓮張蓋砌苔展茵

夫れ池の蓮蓋を張り砌の苔茵を展ぶるに至りては

誰問月燈閣之亭々昇降目眩

誰か月燈閣の亭々たるを問はん昇降に目眩く

亦嫌風穴山之遠々 往反蹤備者也*

亦風穴山の遠々たるを嫌はん 往反に蹤備もつき者也

于時

時に

夜燭頻報晨光欲開

夜燭頻りに報じ晨光開けなんとす

酌黄軒之酒泉

黄軒の酒泉を酌み

献千歳於我后

千歳を我が后に献ず

開紫庭之詩席

紫庭の詩席を開き

快一日於群臣

一日を群臣に快くす

昔鄧禹若不謁光武

昔鄧禹もし光武に謁せざれば

徒為南陽掾吏*

徒に南陽の掾吏たるのみ

今匡衡若不逢好文

今匡衡もし好文に逢はざれば

豈為北闕侍臣*

豈に北闕の侍臣たらんや

謬記勝事

謬りて勝事を記すこと

謂時人何云爾謹序

時の人に何をか謂はんと云ふこと爾り 謹んで序す

幸入蓬萊近聖明

幸に蓬萊に入りて聖明に近づく

逐涼避暑石泉清

涼を逐ひ暑を避ければ石泉清し

五更眠覺巖風冷

五更に眠り覺むれば巖風冷やかに

三伏汗収岸雨晴

三伏に汗収まりて岸雨晴れたり

展簾空敞孫楚枕

簾を展べて空しく敞つ孫楚が枕

開襟自濯子陵纓

襟を開きて自づから濯ぐ子陵が纓

千秋溪体今移得

千秋の溪体今移し得たり

長備天臨頌太平

長く天臨に備へて太平を頌さん

【校異】

- 1、製―制（無） 2、田―日（京、祐、神、鶴） 1月（田ト朱筆ニテ傍書）（賀）
- 3、政―改（鶴） 4、遍聞―遍（聞と傍書）（東大B）
- 5、官―宦（京） 6、署―暑（内A、島） 1暑（ミセケチして署と傍書）（祐） 7、日―目（鶴） 8、青雲―青（雲ト傍書） 9、従事―従（事ト傍書）（内A） 10、今―令（静）
- 11、鐘―鍾（内A、島、賀） 12、班―斑（陽、無）
- 13、婕―健（京） 14、好―仔（京） 15、兮―号（島） 1以（粹） 16、燕―慈（ミセケチシテ燕ト傍書）（東大A）
- 17、沙―汝（ミセケチシテ沙ト傍書）（東大A） 18、兮―以（粹） 19、自―ナシ（鶴）
- 20、苔―吉（ミセケチシテ苔ト傍書）（内A） 21、問―門（島） 1判読不能（ミセケチシテ問ト傍書）（陽）
- 22、慵―墉（島、京、祐、鶴、多） 23、也―ナシ（京）
- 24、光―苑（ミセケチシテ光ト傍書） 25、開―明（粹） 26、快―块（島） 27、席―序（ミセケチシテ席ト傍書）（静） 28、鄧―劉（ミセケチシテト傍書）（内A） 1（島、多）
- 29、南陽掾吏―南陽之掾吏（粹）
- 30、吏―史（内A、島） 1支（ミセケチシテ吏ト傍書）（東大A）
- 31、今―令（静） 32、北闕侍臣―北闕之侍臣（粹）
- 33、幸―辛（ミセケチシテ幸ト傍書）（東大A） 34、逐―遂（東大A、島、賀、鶴） 35、巖―岩（内A）
- 36、歎―歌（山、祐、賀） 1歌（ミセケチシテ歎ト傍書）（東大

- A） 37、子陵―平陵（ミセケチシテ子陵ト傍書）（東大A）
- 38、千―十（朱筆ニテ上ニノヲ補筆）（東大A） 39、體―休（陽、京、山、祐、神、賀） 1林（鶴）
- 40、今―令（静、京、山、祐、神、賀）
- 41、天―大（島） 42、頌―煩（島）

【押韻】

××○○×××^{（下平声庚韻）} ×××××○○^{（下平声清韻）}
 ×○○×○○× ×○○×○○×^{（下平声清韻）}
 ××○○×○○× ×××○○××^{（下平声清韻）}
 ××○○×○○× ×○○××○○^{（下平声清韻）}
 ○○○×○○× ○×○○×××^{（下平声庚韻）}（耕清同用）

【製作年次】

詩序中の「已開長保宝曆」より、長保元年の作とわかる。長保元年夏の庚申の日の内裏作文は長保元年六月九日。「庚申、内有御庚申、有作文管弦、女方入菓子紙等」へ『御堂関白記』長保元年六月九日条

【語釈】

- ◎避暑対水石 詩題の出典は未詳。
- ◎避暑 暑さをしのぐ。「避暑高梧側 輕風時入襟」へ「納涼梧下」簡文帝）
- ◎水石 水辺の石
- ◎人情者聖王之田 人の性情が立派な王者にとつての田すなわち働き場の場である。「故聖王修義之柄、礼之序、以治人情。故人情者

聖王之田也。修礼以耕之、陳義以種之、講学以耨、本仁以聚之、播樂以安之」(『礼記』礼運)

◎学稼_レ学問の実り、成果。『論語』によれば、本来は五穀を植えるなど農作業を学ぶことであるらしいが、平安朝漢文では意味が変わっている。「子路云、樊遲請学稼、子曰、吾不如老農」

「論語」子路「義実少味 未入光祿之厨 学稼忘秋 何弁瑯琊之稻」(『本朝文粹』卷三「弁山水 对」大江澄明)「匡衡不種一頃之田、積学稼為口中之食」(『本朝文粹』卷六「請依檢非違使劳兼任越前尾張等国守闕状」大江匡衡)

◎楽曲者明時之玩_レ音楽は世の中が立派に治まった時には楽しみとなる。「情発於声、声成文、謂之音。治世之音安以樂、其政和」

「詩經」大序

◎德音_レ徳の現れた音楽。「天_下大_定」然後正六律、和五声、弦歌詩頌、此之謂德音、德音之謂樂」(『礼記』樂記)

◎莅民_レ莅は臨む。人民に臨む。君臨する。「君子以莅衆、用晦而明」(『易』「明夷」彖伝)

◎学官_レ学校。学問を行う場。ここでは大学寮をいう。「欲建立左氏春秋及毛詩逸礼古文尚書、皆列学官」(『文選』卷四十三「移書讓太常博士」劉歆)

◎樂署_レ樂所に同じ。宮中の樂事を担当する所。「案所」(在桂林坊。有別当(五位六位藏人)預。買旧信録、以其料充不足。同内御書所。毎月注習物奏聞。或有試)」(『西宮記』臨時五「所々事」)

◎日慎一日_レ日に日に慎重にふるまう。「下詔曰、人情得足苦於放縱。快須臾之欲忘慎罰之義。惟諸將業遠、功大。誠欲伝於無窮、

宜如臨深淵、如履薄氷、戰戰慄慄、日慎一日」(『後漢書』光武紀)

◎延喜之旧儀_レ延喜は醍醐天皇の御代。醍醐天皇の宮廷で行われた儀式。醍醐天皇と村上天皇の御代を延喜天曆聖代と呼んで賛美することは十世紀末の文人達に始まり、匡衡によって喧伝されたが、林陸朗「所謂「延喜天曆聖代」説の成立」(『上代政治社会の研究』吉川弘文館)本詩序の「延喜之旧儀」も、匡衡の延喜聖代觀が反映されたものといえよう。ここでは、庚申行事としての詩會が醍醐天皇の時代に始まったことをいうか。窪徳忠『庚申信仰の研究 年譜篇』によれば、延喜以前にも宮中で庚申の日に酒宴を行った記録は存在するが、それぞれ庚申行事としての宴なのか、偶然庚申の日と重なったのかははっきりしない。明らかに庚申御遊として記録に現れるのは、『西宮記』卷十五臨時三「御庚申御遊」の条に記す、延喜三年二月一日(一月一八日または三月九日の誤りか、または延喜五年三月一日の誤りか)が最初で、他に延喜年間の庚申御遊としては、延喜十六年七月七日、延喜十八年八月二十日がある(いずれも『西宮記』による)。このうち、延喜十六年には詩會が、延喜十八年には歌會が行われている。「延喜十六年七月七日、御庚申、亥二刻事始。供天酒給侍臣、絃歌頻奏之。又召属文者令献詩(勘解由次官諸蔭、献題星橋度雲衣)諸蔭等今夜候内御書所、仍応召候雑色之中。小舍人源相平舞輪台、蔭孫源藏俊於東庭舞皇臺。次献詩、藏人大学頭助紀淑行講詩。次給祿了。〔雑色保忠朝臣火色单細長。非參議四位白单。以下五位絹二疋。六位一疋〕」(『西宮記』卷十五臨時三「御庚申御遊」)

◎風龍三風ハ巫風ハ（宮廷で舞い、家では酒を飲んで歌う悪習）淫風（財貨や色に耽り狩をして遊ぶ悪習）乱風ハ（聖人の言葉や忠臣の諫言を遠ざけ愚かな童子に親しむような悪習）といったさまざまな悪い風習をやめる。「敢有恒舞于宮、酣歌于室、時謂巫風。敢有殉于貨色、恒于遊畋、時謂淫風。敢有侮聖言、逆忠直、遠者得、比頑童、時言乱風。惟茲三風十愆、卿士有一于身、家必喪、邦君有一于身、国必亡」〈『書経』伊訓〉

◎宝曆ハ天子が人民に頒つ曆。

◎延齡之術ハ庚申を守り、三尸虫が体内から出るのを防ぐこと。三「暮秋左相府東三条第守庚申同賦池水浮明月詩」の庚申の語釈参照。

◎樂善ハ善を行うことを楽しむ。『論語』「知者樂水、仁者樂山」

〈「雍也」〉を踏まえた語か「蓋大王樂善之佳遊也」〈『本朝文粹』卷十一「冬夜守庚申同賦修竹冬青庇教」藤原篤茂〉

◎繞日ハ帝を補佐して政を執り行ふ。大臣となること。夢に雲に乗り日の周りを繞る夢を見た傳説が、後に殷の湯王に招かれて阿衡となつた故事を踏まえる。「殷湯云、傳説賃為楛衣者。春於深巖、以自給。夢乘雲繞日而行。筮得利建侯之卦。歳余、湯以玉帛聘、為阿衡也」〈『拾遺記』〉

◎夢月ハ月が懐に入る夢を見ること。后妃を生む前兆。すなわち、「夢月家」とは后妃を出して外戚となる家のこと。「禁字稚君、少学法律長安、為廷尉史。今始三年、生女政君、即元后也。一略一母適妻、魏郡李氏女也。一略一初李親任、政君在身、夢月入其懷。及壯大婉順、得婦人道。一略一使卜數者相政君、当大貴不可言」〈『漢書』元后伝〉

◎青雲ハ高位高官のたとえ。多くは「昇青雲」「青雲之上」などと表現され、高位に登る比喩とされることが多く、「冠青雲」という修辭は少ない。「可憐白華士 永願凌青雲」〈『全唐詩』卷四百一「和樂天初授戸曹喜而言志」元稹〉

◎左龍ハ劍の左に龍の象を付ける。高位の武官のしるし。「劍之在左、青龍之象也。刀之在右、白虎之象也。」〈『春秋繁露』服制像〉「是以膺籙受圖之貴 非孝無以約左龍」〈『本朝文粹』卷九

「仲春釈奠聽講孝經 同賦資事父事君」菅原道真〉

◎右貂ハ冠の右に貂尾の飾りを付ける。高位の文官のしるし。「内史令金蟬右貂、納言金蟬左貂」〈『隋書』禮儀志〉

◎丹霞ハ日の光が映って赤くたなびく光。仙界の象徴。ここは宮中

が仙界に等しい聖地であることを示す。「願登青雲路 若望丹霞梯」〈『全唐詩』卷三百九十七「青雲賦」元稹〉「四九三十六天丹霞之洞高關」〈『本朝文粹』卷三「神仙 對」都良香〉

◎林鐘ハ十二律の一つ。六月の音律。転じて六月の異名。「季夏之月、日在柳、昏火中、且奎中一略一其音徵、律中林鐘」〈『礼記』月令〉「林鐘之月、草木盛満、陰將始刑」〈『呂覽』音律〉

◎班婕妤团雪之扇ハ前漢の成帝に仕えた班婕妤が、帝寵が衰えたのちに「怨歌行」をつくり、自らを秋の扇にたとえた故事を踏まえる。「新裂齊紈素 鮮絜如霜雪 裁成合歡扇 出入君懷袖 動搖微風發 常恐秋節至 涼颺奪炎熱 弃損篋笥中 恩情中道絶」

〈『文選』卷二十七「怨歌行」班婕妤〉
◎燕昭王招涼之珠ハ燕の昭王に献げられた黒蚌から生じた珠。この珠を懐に入れておくと、どんな暑いときでも身体は涼しかった。

「燕昭王時、有国献於昭王。王取瑤潭之水、洗其沙泥。乃嗟歎曰、自懸日月以来、見黑蚌生珠、已八九十。遇此蚌千歳一生珠也。珠漸輕細。昭王常懷此珠、当隆暑之月、体自輕涼。号曰銷暑招涼之珠」(『拾遺記』)

◎張蓋カサをかさを張る。蓮の葉をたとえる。「松張翠織蓋、竹倚青琅玕」(『白氏文集』三〇三「香鑪峯下新置草堂。即事詠懷。題於石上」)

◎展茵シマ敷物を延べる。苔が庭に敷いている様子。「苔茵展以無塵松蓋傾而如雨」(『本朝文粹』卷十「冬日於極樂寺禪房同賦落葉声如雨」慶滋保胤)

◎月燈閣ツキトウカ唐代、長安にあつた建物。元稹と白居易がしばしば遊んだ。「僧餐月燈閣 醞宴劫灰池」(予与樂天、杓直、拒非輩。多於月燈閣間遊。又嘗与秘書同官醞宴昆明池)」

〈『全唐詩』卷四百五「酬翰林白学士代書一百韻」元稹〉
◎亭亭ツツ高くはるかなさま。「亭亭映湖月 瀏瀏出谷颺」(『文選』卷二十二「泛湖帰出楼中翫月」謝惠連)

◎風穴山フエツタマ風穴は崑崙山にあるという伝説の洞窟。北方の冷たい風が吹き出してくるといふ。「鳳凰之翔至德也、一中略一過崑崙之疏圃、飲砥柱湍瀨、還回蒙汜之渚、尚伴冀州之際、躡徑都広、入日抑節、濯羽弱水、暮宿風穴。」(許慎注 風穴、北方寒風從地出也)」(『淮南子』覽冥訓)

◎遠遠トウトウ遠いさま。「依依向余照 遠遠隔芳塵」(『全唐詩』卷五百四十「離席」李商隱)

◎夜燭ヤタク夜のともしび。夜燈に同じ。「朝盤繪紅鯉 夜燭舞青蛾」(『白氏文集』二四八八「松江亭携樂觀漁宴宿」)

◎晨光チンカウ夜明けの光。「曉月漸沈橋脚底 晨光初照屋梁時」(『白氏文集』三三五二「奉和思黯自題南庄見示。兼呈夢得」)

◎黃軒ワウケン黃帝軒轅氏の略。中国の伝説上の帝。姓は公孫。神農氏に代わって天下を治めた。始めて医業を行ったことで有名だが酒との関連は未詳。「仰玄鑑以来祇 望黃軒之往駕」(『菅家文章』「未旦求衣賦」)

◎酒泉チウセン泉の名。酒の味のする水がわき出たことからその名がある。転じて大量の酒。ただし、黄軒と酒との関連は未詳。「応劭漢官儀曰。酒泉城下有金泉。泉味如酒、故曰酒泉」(『芸文類聚』水部下「泉」)

◎紫庭シ宮廷。「臣生長辺遠、希涉紫庭。稀習失守、言不尽心」(『後漢書』皇甫規伝)「暫趨紫庭 疲如遠征之卒」(『本朝文粹』卷五「為清慎公請罷左近衛大將状」菅原文時)

◎鄧禹トウウ若不謁光武トウウ鄧禹は後漢、南陽新野の人。光武帝に見出され將軍として功を立てた後、大司徒となった。以下四句は孔稚珪「為王敬則讓司空表」中の以下の句によるもの。「鄧禹若不遭漢光、則南陽之掾吏。微臣若不逢明聖、則孤城之式客」(『芸文類聚』職官部三「司空」所収)

◎北闕ホクケツ之侍臣シ北闕は宮中のこと。帝の側にお仕えする臣下。匡衡は長徳三年から寛弘五年まで東宮学士・侍読を務めた。(『二中歴』第二儒職歴による)

◎勝事シヨウジすばらしいこと。よいこと。「勝事猶可追 斯人邈千載」(『全唐詩』卷一九八「終南山双峯草堂作」岑參)「謬記勝事」

「猥記勝事」などは詩序の結びの言葉の定型。「謬即勝事」(『本朝文粹』卷九「暮秋陪左相府宇治別業即事」大江以言)

◎蓬萊Ⅱ東海に浮かぶという仙境。ここは宮中を指す。「使人入海求蓬萊・方丈・瀛洲。此三神山者、其伝在渤海中。去人不遠、且至則船風引而去。蓋嘗有至者。諸遷人及不死之藥皆在焉。其物禽獸尽白。而黃金銀為宮闕。未至望之如雲。及至三神山反居水下。臨之風輒引去、終莫能至」(『史記』封禪書)「寛平之始 服綺紈而遊蓬萊之宮」(『本朝文粹』卷五「為貞信公請致仕表」大江朝綱)

◎聖明Ⅱ天子の明らかな徳。また天子その人。「奉為聖明并法界衆生」(『本朝文粹』卷五「請被以私稻各三千束加奉正稅充給施無畏寺三昧料狀」兼明親王)

◎石泉Ⅱ石と泉。「煙霞春濃 泉石秋冷」(『本朝文粹』卷十「春日同賦隔花遙勸酒忘太上皇製」菅原輔昭)

◎五更Ⅱ一晚を五つに区分した五番目。初更(午後八時)、二更(午後十時)、三更(午前零時)、四更(午前二時)、五更(午前四時)。五夜に同じ。「夜漏起、中黃門持五夜、甲夜畢伝乙夜、乙夜畢伝丙夜、丙夜畢伝丁夜、丁夜畢伝戊夜、戊夜畢、是為五更」(『漢官旧儀』)

◎巖風Ⅱ巖を吹く風。「傅氏巖風 雖風雲於殷夢之後」(『本朝文粹』卷五「為一条左大臣辞右大臣第三表」菅原文時)

◎三伏Ⅱ夏の暑いとき。夏至の後の第三の庚を初伏、第四の庚を中伏、立秋の後の最初の庚を末伏という。長保元年の夏至は五月二日、立秋は六月十八日。本詩序の制作日である六月九日は中伏に当たる。「風清泉冷竹修修 三伏炎天涼似秋」(『白氏文集』三五八八「池畔逐涼」)

◎展簾Ⅱ簾はたかむしろ、竹で編んだむしろ。簾をひろげる。「緑

竹挂衣涼処歇 清風展簾困時眠」(『白氏文集』二七三五「池上即事」)

◎欵Ⅱそばだてる。寄りかかる。以下は「遺愛寺鐘欵枕聽 香爐峯雪撥簾看」(『白氏文集』九七八「香爐峯下新卜山居草堂初成。偶題東壁」其三)による表現。

◎孫楚枕Ⅱ晋の孫楚が「石を枕とし流れに漱ぐ」と言おうとして、誤って「石に漱ぎ流れを枕とす」と言った、『蒙求』「孫楚漱石」で知られる故事を踏まえる。ここは次句の「自濯子陵纓」との対句関係から考えて流れのほとりの石のこと。「晋書。孫楚、字子荆、少時欲隱、語王武子。言当枕石漱流、誤曰、漱石枕流。武子曰、流非可枕、石非可漱。孫曰、所以枕流欲洗其耳、所以漱石欲礪其齒」(書陵部本『蒙求』七一「孫楚漱石」)

◎濯子陵纓Ⅱ子陵は蔽光の字。蔽光は後漢、会稽余姚の人。若い頃、即位前の光武帝と共に遊学したがその後名を変え身を隠した。羊の皮衣を着て沢で釣りをしているところを見出され、光武帝に召されたが、巢父の、堯帝が許由に位を譲ろうとしたという話を聞いて汚らわしいことを聞いたと言って耳を洗った故事を挙げて固辞した。(『後漢書』「逸民列伝」)濯纓は濯纓濯足の略。濯纓は冠の紐を洗う。水が清ければ冠の紐を洗い、水が濁っていれば足を洗うように、時勢に応じて自身の進退を決めること。ここは、冠の紐を洗えるほど水が澄んでいることをいうと同時に、今が聖主による治まった世であることの風論にもなっている。しかしながら、子陵と纓とにまつわるエピソードは未詳。蔽光のように世を捨てた賢者でさえも立派な御代においては仕官しようと準備するという意か。或いは李陵纓の誤りか。李陵纓ならば、漢の李陵

の「与蘇武詩」による修辭。「臨河濯長纒 念子悵悠悠」へ「与蘇武詩」李陵

◎千秋漢体 千秋は千年。清涼殿の庭が千年先までも残るような立派なものであることをいうか。しかし、それなら、「今移し得たり」が落ち着かない。或いは千秋漢は固有名詞か。

◎天臨 帝のお出で。行幸。「觀其天臨咫尺 逼金輔以展筵」

（『本朝文粹』卷九「早春觀賜宴宮人同賦催粧応製」菅原道真
（『菅家文章』巻にも収める）

【参考】

『本朝文粹』卷九に本詩序を載せる。

『和漢朗詠集』上夏「納涼」に本詩序の「班婕妤团雪扇」以下の隔句対を採る。

【通釈】

夏の夜庚申を守り清涼殿に侍り、皆で暑さを避けて水石にむかうという題で詩を作る。帝の仰せにお応えする。

そもそも人の性情はすぐれた王者にとっては田圃のごときもの。したがって世の中が治まれば学問の成果は自ずから稔る。

音楽は見事に治まった世においてこそ楽しみとなる。

したがって政治が整えば徳の現れた音楽が天下に遍く聞こえる。

我が君が人民にお臨みあそばして以来、大学寮は時宜を得て栄え、音楽を担当する官は活躍の場を得ている。

こうして皆日に日に慎重にふるまい、何事も延喜の御代の旧風を

伝え、さまざま悪い風習をやめて長保のめでたき年となった。ここに於いて、我が君は、庚申を守って齢を延ばす術をお忘れにならず、また美しい時季を賞でて善を楽しむ心をお忘れにならずに今日のこの会をお催しになる。

我が君を補佐し外戚となる家柄のものは高位に昇って政務に従事し、文武の両官は昇殿して我が君のご恩をお受けする。

まさに今、六月の炎暑を避けて、清涼殿の庭の水石にむかう。

岸辺を吹く涼しい風に吹かれてみると、あの班婕妤が嘆いた雪のように白い扇も長く忘れたまま。庭の砂を照らす冴え冴えとした月光の下では、昔燕の昭王に献じられたという伝説の招涼の珠も自ずと我がものになったような気がしてくる。

かさを上げたかのような池の蓮葉、しとねを延べたかのような砌の苔を見るに至っては、いったい誰が涼しさを求めて、あまりの高さに目がくらんでしまうような月燈閣に昇りたいとか、行き来するのもしやになるような地の果ての崑崙山の風穴を訪ねようと思うだろうか。

時に、夜は刻一刻と移りゆき、明け方の光がひろがりつつある。

臣下達は殿上で酒を酌んで君の千年の長寿を寿ぐ。君は宮中で詩会を開いて臣下達に一日の楽しみをお与えくださる。

昔後漢の鄧禹がもし光武帝に会わなかったならば彼は南陽の掾吏として空しく人生を送ったでしょう。今私匡衡もし文学をお好みになる君にお目にかからなければどうして侍読として君のお側近くにお仕えできたでしょうか。謬って今日の勝事を記しますこと、世の人々に何と言えよばかろうかと考える次第でございます。謹んで序を奉ります。

幸いにも仙宮にも等しい清涼殿に入り帝のお側に待す
暑さを避けて涼しさを求めれば殿庭の石と泉は見るからに清ら
かだ

暁方に眠りから覚めると巖を吹く風が肌に冷たく感じられ

夏のもっとも暑い頃だというのに汗は収まり、気がつけば岸辺
に降る雨もやんでい

竹のむしろを敷いても今日は庚申なので眠ることはない、昔孫
楚が枕にしようとした石も（誰も眠らないので）そのままにな
っている

涼しい風に襟をゆるめて冷たい流れに衣服を浸すのは、治まれ
る御代にお仕えしようと皆冠の紐を洗って仕度しているかのよ
うだ

今日のこの水石の様子は千年先まで残る溪谷の景色を移したも
の

これからも末永くわが君のお出でをお待ちして平和な御代を頌
えようではないか

(きど ゆうこ・鹿児島県立短期大学助教授)